三十二 梅枝

梅枝

12
4901
32

早稲田大学図書

うめが枝　梅枝

さう稿に成るのは、めでたく十二月の事
を更へられたので、源氏は改まる女の成人の式を迎
ときに、式の儀式と迎い申に準備
に心を配りながらとして、出仕
[illegible]
[illegible]
宮の内成人式、謂ゆる[illegible]
儀も出来行うにある筈なので、引きつづき東宮
妃としての出仕もあることであらう。

[illegible]

の雅号をすみだ、公紀神社の東隣もさきて立て
辺まもなく日の暮れて、古屋は心も淋に堂
物を会せられる。成信うに下る唐土屋敷
に近い土地の長安太宰太郎の記載の
があるのでお話しにならうちか、やはり昔の俗よ
りは昔つてゐるから小い、色の多あに校べて見よ
うと思ふて、二條後の古屋と南あせて、その帝
に、唐土修寺の昔の品々を、いろ〳〵と勿論
へば略にならと、手ものとよ、錦や綾時代も始
めて知る、古い物にこそ奥ゆかしい含蓄
つよ味ひ

が与へられたのだと云ふ新堂技法によって、近日流行の出さうべき洞房新の雰囲気や多物や裸しなどの縁の材料に対する相違の古代の模様は高貴人の飾りとしたりよ、これら侯らの絵や金襴などが時の物に何もつかまれるものを作らなので先づ之れと使ふことに古来技術のなされ、それから高級に古物を用ひる上、これは何に、それは何にしたらよいかを考へて命名されること、今交太宰府から新上京絵巻物などは当時の人々にお馴染みの品ばかりである。

但し香ども其の当時の

と私り等へて女子達に伝えられ、此の中
二行つつ今なほ出版されて世に行はれる。
私の。
それから大臣の方で、いろ〳〵の内閣
り知、自上達部達にかつくへき紀氏の品りと、
の所為へに、私のものとも私でも掛りなつ
て驚かれる。
これを同時に世見達に於いて
も、与へられ者と違う驚つて、それを驚り慣す水
品の拝金紅の音、さらく、がうく、と響く聞こえ
く聞こゆるである。
大臣は人を恐ぎ高ねに
好り新めて、仲明天皇の函和中者、の音「仁明」か
ら

(傳)はかの中に収められた秘傳のうちの二つの秘方と、どうしてこの聞き伝へになつたのか、一(心不乱)専心

調べてみられる。

剣術に学ぶの上なる事の

剣の神妙伝授(奥義)に、第七段に当てた秘密の宝

を、秘別録にしつらはれ、これはまた仁明第七

の皇子、世に八條の式部卿と申して秀逸の名高

でつらつしやる、その方の秘伝を伝へて、弾正

殿年されう。その間あるに隠く秘書にしてれら

れるので、勝負の樫杖と鉄扇やかまくくして、大

臣なる名を明治天皇の時代、後世の時代、傳授をなりぐ

物足らない。いづれか異論い深い事りかする
かいづれが(まく)行つべう文、帝上でそのちの面
皇があつて僕者が拙る。のでなくなるとおもふと書かれる。
人の祝らくもない、る僕にみちたる命の歌
であるかくして方医の方でも、上のもはでもた
前にあつて知しいみ教言ばりで
られかが秘密の内閣にもうれ
くれ、その中に線に香童の筆の拙童の作
好墓碑の味Qちどびちるが、又明れやう作
田新
拙者と浅ヤつ、これらのもろの

夫婦どもが深く親しくしたその間に、お二人が若心でれた一句の俳句を作られた。傷れた者どもを慰めて入れようと思ひすのであつた。

その年に二月の十四日たる。書面かしと、と降りて、お客先の紅梅が咲いて、至とりひ者とりひ、似うもつくづくなつかしいとりひ。

時々に、節分の宵部屋の宵かかるうかた。

そして、あれまあ、あの、一面に

に迫りそうしたちどと、仕掛携帯ばすかる。

の宵は、なから、何にお前の

陽もるく、其のうちの事とお後（会ひに）なる
つ、お庭の梅を家でて入らっしゃるとて、千家そ
こへ、前の醤院様（御様の宮）からでんきいります
と云つて、あをと花ざかりの梅の枝につけた
内文を持つて来た。宮内庁と種宮との内閣
からたついて、かりて閣員してゐる事もあるの、
で、

先師

どうりでおたるですか。

明治四四年

押しかけるの内侍見るなら改らいですね。

と言つて、私をいと思つてゐるんるので、御ほう笑な

すつて、

寿子、秀子さんの様子の為に、大信行つ

けの事と解らずにたとゝ、軍速に現物

に接へて下さつたのです。

と言つて巾文かけは御陽しなすつた。

秀子さん沈の笠に踏瑞の坏を二つ拵へて秀子

大粒にころ〳〵させて今出て行く。

庭へ行の心事は、付踏陽の童に五寸のおの

故と、自ら踏瑞の手には拵を雕刻して、両方用に

拵に引き伝んだ線の拵迄すると、両自く曲らく

かつなてしやれた枝に工風してあつ。宮はきれいやかさま淀つたものですねと云つて、内房と

のられまと、孫が使つてみる。

前の手は鬱りにし枝にとまらわでう

つくん神に湧くしまや

（枝巻の孫に「書意きて影り意きにける梅の花

たいかしばかりで枝にとまれる」とある。この花

の孫くど綴つてゐない枝田枝人と引く考うも

孫くど留まりて居りなくかゝしか移る人の

神次第で咲く使みとまりますけはかかないでせう

よ。

梅に鶯、柳の糸、桜の花、

陽さくの煙つた香ですから、聞くほどの香はも

う鶯もうつて居りますまいが、いかにぬきに、秋

に赤絵を強された花の心には、その香も利き深

く沁みわたりましよう。

二月ほどのあつさうと著

きすぎたのを汚れるつて、宮は喜ばありけ

に泥鰌さうた。

夕飯の中膳が揺れて、

浮世絵を張りて十分に風を物のうれ、紅梅絵の

角張の細長が浮くた女の裏をかげけられた。

ちぢからのれ迫移れ花と同じ紅梅かざりの色

の紙で、例のお尼前の物を折らやてそれにかけるの宮は

内容の推量されるやうな、奥部にいと文で

すね。その中に何か陰がありそうに思はれる。

まさか陰くも陰くもしるしですって、いろいろ

とお考みなすって、いろいろ思つて

ばかりゐる。

何が書いてあるすで

かしら。

かすれぬ秘密の影かもしれぬ

のが、心苦しい次第で

そこで、作者はまづ彼のうれた筆の穂に、

花の枝をいとゞ心をしむるある人の

そかめん香をばつゝらもと

香に匂へて贈られた梅の花の枝に對して、実に

心をしみゝと思はれてゐるのを

てすよ。実は花の香はまらわどそれを言つて、

人の関さとかのさうを香りもそれが枝れぬ

はれども、その香りと訪れの枝に高雅心を惹か

れのです。二とてもお書きになつてあつたのでも

うか。但氏は枝をうて手紙に言はれた。

高市皇子に対へると、あわうな騒ぎとするのは物語のやうにはあらずけれども、もうひとつ、の外にもあるものと思ふと、一人娘の死遺骸の保護の仕方の心配からでありと、からゆるしてやるのがきまりの心配からでありと、からゆるしてやるのがきまりの心配からでありと、からゆるしてやるのがきまりの

が親様の高い

も強に氣高く大きな部屋で、

から、仕事におらず、有り余るの富と広間

に慰りるのは、異れ多く思はれます。

と仰しやる。

それは考へもお考へつきになるべき事

で、第一に此の方も高い背の物で入うつし

やりますよ。

と云つて、いろいろ内証もとち警戒を

そこで宮の内証をたすと好い考へ

如何遊の苦心して作なれば

なるほどなるほど、

どの夕暮の雰囲気の面白味に通みていると、何名に
にお使を言ってい代中間は、学生物理学
ちょいちょいと面白くつくろひ始つて、
はされた。
丁度よい時分、判事にまつてさい。
ゆる俗れにかえせんで、その分に勉強する者が得
ありませんか。
と作しやつて。代少取とも
にふる。宮は
その者が知れて
強情ですが、
16

と所謂遊戯的ものが、なかなかの内容達で、但し言葉のあやまるべき点もあり、或は偽れ、或は及ばぬところがあり、それについて、今なほ種の中のほんの一種の指摘して微細に過ぎるを恐れ、批評の眼、時に、偽者の気別をきちんと定められたのである。

かつて始めて我が藝者の芸術と称するものを、これに始めて我が創設にかゝる二種と今こゝを三つに分り、更に進むべきものの三種とを芸術的の意義

が所謂おき迯げ
傳水の急に準へて、右
近後次の西の傳部の
下から流れ出る水の急に
傳のてかれたそれと等の西大夫惟光、
うて系係にあつて
おるそのよの兵衛尉に
右掖らもたれた。
宰相中將（又從）がそれと兼
家で主上がうれる。
實は
これを主、
とてもきく
い實刑者と考へ
ちいる。
られもしたな。
どうも之の
如何

と言ひ始めるのから判ぜられる。

これは何でも同じことといつの間にか流行の形式が拙いて、同じ意味の方が、彼方からも此方からも感ぜられるものらしいが、それと女達が型に囚われず、流行に従ひて、伝播性を生ずるとして、各々心々に各々作り出すものと、その生来の性質と、更年期とを伴ひ、性格を吸ひ、性質をもつて、性格を生ずるものであつて、

みんな傷れて、いづれをいつても傷者の

されつゝ、実に事情の趣かる面白いものであつた

つは強いが中に、衛院（推定）の会はせられた

内黒方何と云つても奥角い、しんみりした
白らが別で侍従大臣の会
なぐられたり、すぐれて人情こい、しや
れた者と称ぶる。
と定められた。
植物花の三能があつ、その中で、植花は花かわで祈ら
しい味らがあ、そこにはしほさやかな、すうつ
と陽き動物と感じさせる物色を保つて、改らし
い白らが加味うてゐる。
所謂「下」の者の手等
に、見に伴なやくゆうせたち、そ、そ、
これは上の

匂ひはあくまでもすまいな。いやどうも相

で、

と言つてので、嶺さんの。

夏の代方義勇兵、他の女達が、それぞれ

の時の高い心にて

戦争さへ、其の中に、各自の自分

ちが人数に入つて

来ない、と、

烟と云てさへ云へば

それ、

自分は、

戦争に、

と云ふやうな。

一寸待て、

夏の人々は

よの妻

の

つた、

しく

みな

心から、

嶺だ

義勇

一種

戦争心と

ぐ

ぐ

ぐ

ある。

その作方は、他の如何なる人が、その人の
庭に手塩と蒔んで、書の上は掃除、その作方は簡
単と申されて、その自ら〳〵の生活に適する様に
なさるかをらい。なぜを中心として、人に老と
年ばかるのも気が利かるいて、特に衣と
蔓うまに用ある。蔓の変化に目を奪はれられた。
蔓名手の気方で傷れたのは、書の筆法の如
方と掃いて仕志利度の特に工夫して作り上げ
た百歩の気方である、それをこそと、あと思た
つかれて、数ひなく風流味のあるのと、いろ〳〵

の材料と取りあつめて作りもされた品の選び方に、かの海岸に美が利いてゐる、と、云はれるに他の長所とそれぞれ劣るものとて出だして、花と枝とはたせつゝを作のまくれさるものが一つも無いと、それぞれ八方美人が各の高度の利者といふものであらうと思はれる。

その年に十四の月が咲くと群き出すので、やがて大阪商家と都のうち、いろ〳〵と苔の古物法をもつて、

にぼういとかすみて眺むるの月影がおくゆかしく
見える。地には春雨の名残の明かるく
吹いて懐かしく花の香を運んで来る。
はるかの向ひが一ぱいに霞うてゐる。天に眺
月孤に物が寂しくて、
香りかすかの中に遠びゐる人々の物すごい
やれた心持にうれしいのである。耳を欹て
ると、隣室の婦人科のベッドに明日の儀さを
語るに、母上人などが私多集まりて、第、和琴、琵琶
などの絃や撥を調整してゐるらしく、面

但い節の書かれぶり関こえて来る。そこへ内大臣の内を意達頭中将や弁宰の辞や修理大夫えちか、那武名簿に名と記す形式の足音だけで暫くくとまれつのと、ちあしくとれ曾のなすつて、子連に対ども吐に対する弱者たちなる。

宮の内侍に対する北堂大臣の内侍なる十三絃を抱き、四位侍従の頭、中将は和琴を載いて花やかに素々て妙のた逢、但ともこれなる面白さである。宰相の中将（文藤）は横笛を吹かれた。

春節に初ーに恋の花やかな刑調を、雪月に伸ばす先遣

れとなげり、吃きをてられる。

辭サ將が拍ゐを
弱つて僅馬要の拍数を敬ひをしれた調ゐの面
白さは幸かつた。

此の歌は、早いもの十數年前
の作（柳の長）歌集の所にまだ載せるき童謡で高
砂と敬はれた点である。

係式がつたり僅しで
はなく、寧ろ大胆（がとび）も時々の
助ゐや拍子ちと迫が
してくつろいたお集より（おも）ながら、実に面白い花
の作迫（おも）である。

宮は兄ち（おも）匠に多と新めうれう
序に、多作を集めて、

芋の葉はやはりとぶあくあわん心しめ

つる花のあたりに
さらぬだにかをる梅が香に心がしんみりとな
つてゐる香に梅が枝と話すれば（子供等のやうな）見かをりと関
いては、更に〳〵悦惚として元祖の場に入るこ
とあらう。」ちやの節に、いつまでか野辺に心の
あくがれん花ゆゑ散らすなよ今代もへめべしとあ
りますが、も花が散らずば、千年あまりの内に
花つばりますまいよ」と言はれて、源氏はたとく
ち後悔し、進有う！

（注）
春も春もうつるばかりにその春は花

いく前を離れずもあらなん

（どうか私が彼の梅の花の色も香も君の心に
しみついく時までに、此の香は、花さく我が名を知れ
ずになってもきい、絶えずとどめてきい。）さあ
と言って、頭を頂、中将にたきうて、中将は低い
て更に宇相中将（文章博士）にそうす。弱を低くて、
君のねぐらの枝もなびくまでぬれぬ以
きと今も往年の為たり
（昭和横笛の明言と聞きながら寝ておうる者も多
かきもの。
一つ其の管の名をかりてある
七時雨の

枝も折れ飛び、住、やはり強く花半の花の香を吹き通してやってきい。」と言われたこと、又家の中時から、いや作也ではあるまいが、

心もとない風のように、めづる花のあたりとあくまでも吹きやまるべき

「風でさへも心あるかに、花を散らす動じ、蕾の眠りを覚ましと、移りて通るうぐいす梅の花咲くあたりどうしても身のるたい、まらぬ程吹き来ること

とかも来るものです。」

「それなら春雨の事情は事」と言われて、なるほど雨の中の少情が

さうに笑われる。

雛の少情が

新

霞だに月と花とを隔てずはねくらの

雲もほころびなむ

（霞さへ隔てずば、月が明候と花を照らすべ
きなり。然るに花が明月に伺つて絶びてゐる
ぬく、明に対して月を聞いて月に咲くこ
とであらう。せにつらいのは隔て侵氏と内文
匡とも伺らう。多分の人と姓の雲井
所とも伺ひて隔てがあり、人の雲井
所で雲と咲くことが出来ぬ。此の隔て雲
たちらばと咲く雲に紛れ消えた

のであらう。

4 代り繰めべ」と言はれちが、

宮はとに内詞の通り二晩越だ明かして、明りが

たにちうて帰りにちうた。判者としての内紳

の内賜物に、俳氏内自身の内種の内直系の内縁

東一揃ひ、それにまよ、ちの解れない、蔓絡二重

を巻くて、内車まで寄つて、直に美しけれども

宮が面白がれて、

花の香とえならめ紳に縛してこと

ちやすうと姫やとがめん

義にも準ずべき

ちの香を、

賜ふた

主張なの内容に

うつして行つては、家は待つ妻が、うれしく修
い、大なる間違事が起こらぬうちにと云つて、角を出
やすことでせう。」と作しやると、大臣は
まうありの巣がちれまつちゐる。
意気地がない、と云つてお笑ひ遊ばさる。
牛につまづく度へ、進つありて、すかさず
めづらしと女房人も待ちぞ見る花の
にしきを着て帰る見
「まあ大変ひ、帰つて内緒なさい。」
いと、内留守番の奥方が行ちつけて筋通さ

れるやうよ、梅の咲き匂ふ頃から、夏の香の久
敷刺に新鮮を揚げつゝ、美しい情景と共に帰る
事でありませう。又とない結構な事とは独ひなさ
るに相違ありませんわ」と作じやうと、いやおつ
わりやうれすたよ。陳夫々と云つて嬉し
がりなすつた。宮は外の次ぎ〳〵の男達に
陳えちゃやうにして、何長や小姓などをかづけ
られる。

かくて前行の迅雷事件は、いよ〳〵その
きびしくなつて、中略が西の方なにも侍りにな
つて、

大臣が参内にきすんん

この時は戦の時（今の宇佐八幡）であった。

の代表の面の前半（宇佐）と言うの武場にしつらつて、代表上げの内侍ともやがて鎧着に鎧

いて、彼の代宮にやつて来た。

彼の上も代の代表に代替

宮を以て中宮に代表があるとの

方、堂の上、西の山を遠か勢知らず来なの

押し分けて、おつのは。然かちのであった。

の時、所の十二時過に池水の代表を見た。

所四は勝敗を見つつ

所うが、代表は実に面白し

大原は中

中宮

宣に伝授致すべ

お足拭てゝさるまいとつゝみと松みにし

て、まだ女としてのら[illegible]こ湯

の[illegible]を造んで広間通り[illegible]

うゝか[illegible]後りの例にそうはせ

ゝあと、ふさいゝ一ぱいに立ぱつてたゝの

でたゝいます。

と申上げられる。中宮

中宮

伊のお[illegible]

どうまぎれ[illegible]

仲間らに
ちゃ
一方さつ
ちゃ、部つて
極

りが悪い位で
ちゃ

と、何でもない事のやうにちゃ言ひ消すねばすちゃ
関係がいかりも
る位らもい事情と見せて入ちゃ
らつしやるので、ちゃ
と、ちゃ一円持つて見る勇
の目を表い位にお答
とお恢ばにるつたのであ
り生明るのちゃ上が、弟はとにかく第みの
の一生のちゃ事のちゃ
ちゃ
ちゃの方神を見
知得

ぬ事を此のごとくまるく書藤明に思つて居らぬ
ものも多くの者で呼び寄せられうかとも思ふた
りれども、世間の批評を恐れて到頭お見合せた
ものとなつた。かういふ物の係式は、一通りの家
に孔いつも、なかく炭鑛ちうるさいものである。
まるに、沒人や業者の意味に於ける大神である。
るの片端で、例のたどく〜しい筆で空疎
の点、印つて下のに為る孫子にるらうかと思つ
て細かいは書かぬことにする。

青空の古元時代此の日の二十日過きに終は

あす？

せられた。

もうたゞ大人らしくなつてゐうしやるので、病と持つたが嘘に違ひない内心の運命と心掛けて、みられるけれども、六條の大臣が志の足りてゐられる様子が一通りでないので、出来て来た夢に逢ひ、見た目に無つて、様つて、たち居やたち様ちどもも、段々あからさまにたちぬい様と様ちながち思ひたとまゝ聞きて、ほゝが言はれる。

それは是だけ心得る事である。

姫と内きゃる事節の意味合は、天窮と読

る女の鞍をある中に、それぞれの特長をも述べ

ずに眺めて発揮きやつ、、めしてもの時めか

さうとしよう的にあるであらう。それに準

山の麓いを流る姫天道を打ちながら

迂廻して引上げられると、こと葉は、さ

つり宮仕と続ける命の呼がある。まい。

と言はれて、光づかるの姫天人の係が迎刻さ

れた。人々は石垣の仲間入が磨くで、後、決

ぎくに、急ぐのと、泳へ、呉れしがめて、時踊

てあられたので

39

V微

あつたが、中止（延期）の事が所々に伝はつて、それが大臣の耳に入つた。賜はつた所の御

いらつて、梅子殿と呼ばれる。之れに新しく妃

殿の所生は、若宮殿下の御控所の御家令（しはいき）（翁童）

に手を引かれて、入内の延びに、なつたのと、東宮

が行啓がつて入らつしやるので、特に取り運ん

で、四月にとお定めなされた。内用意の内閣

数度、もとある所へ電報にかへ聖へて、ちがひ（みそ）

自身も御携帯やら繪葉書の主義、平和の参考品

に内目を為（つい）、遂その勝れた人芸を示し

集めて入会に廻きとわけさせ品評とか賞へ廻ぶ
た。又芸子の話どりに収ひべき物係小説
ちゃで、そのまゝ手引のちゃ手本ともるうべきも
のとお望びなさる。
四方の中には、昔の高上絶倫
の手跡によって、大名筆の名を強しいる能書家の
作品も飾る事に成ました。
か堂の上にお話し廻なしたこと、
世の中の高事、すべて昔に比べて次第者り
に都に、係く移くなって行く境遇の世に
なるか、唯だ一つ假名だけは今の世に

於いて、幾上の進歩を遂げてゐますよ。

昔の能書家の様な、厳格、端正、謹厳の筆跡は、型が極まつてきちんと安定してゐるやうだが、俳句に変化に富んだ、重複性が欠如してゐて、一方向きの嫌ひがあります。

この俳句の何ともそれは、近代になつて著しく出て来た傾向のようです。

人も、例つて足元を見て、筆も、ちゃんと、紙が、彼が如き手の筆跡に心を入れて、進心に、勇つた時々に、絶妙を組する手本を得

出手に入れます。ちがいますが、その中に、中宮の内侍
長、侍従内侍、小式部内侍、伊勢の系もあります。
さっちのと、ほんの一行ばかり、いかにも自
然で、意味深長な味の、変に長いのを待って、あ
うまいものと抜別に感歎したことがあ
りますよ。それに引き延ばされて、つい動かるま
にきれいなのです。内侍
は紙と紙とで、紙と紙との間と間に挿し
ものに
見えるけれど、中身さうでなかなか
つたのです。
それは、次のうして中宮の

古後見ることのできる弟子とは、師匠の顔がなほ目
が目の世から消えて、さらに見違つたと、
彼の親言と見違へてとさうことであつた。
中宮の古筆跡は、細かい点に点を加へ行きに
て親に面白いけれども、痛ましい力に自強
けとうろがあるやうな。
惜しいことに、琴とてもあつてお話しさうさる。
それから時入道の宮（義重）の方は優しい心
なかあらはれて、所柄もしまれ
たけれども、弱いところがあつ
て、

て、結構な時代がありますことよ。

桂院の高傳（眠月花内傳）、このお方は実に近

頃の名手で入らっしゃるけれど、後ろに

控えながらの曲をやって、いわみの癖が引き

物でしたね。しかもそれはそれとして、かあ

の眠月花の名と前編院の桂言と、それから

此度の名人といわれる人と、此の三人が、色つ手書

きの名人といわれますでせうね。

と云って、三筆の心持である人の伝を伝されても、

いえ、その人達の仲間にみれていくさい

いはゆる和文さまで、独立あるものとなりたるは、

と言はれると、

例の、さう身ぶるひするもの、

君の筆跡の乱れかたは、

らね。

しかし明治字にかはつてから、

と言ふやうな風潮のあるのに比べて、

名の分はちとらうしてゐる。

呼かあるやうぐるね。

と言つて、まだ男の筆跡や細もとおかけるとも、

見して、元仮名表紙や細もとおかけるとも、

長祐卿の宮やたゞ御のりとりも、一つ敷みまさる。

そして自分も一刻は考さなせらる。

あの二人、名筆気取りで、どんなに感ってゐるとも、自分にはまち為へすまい。

と言つて已徳の自惚と迷のと迷ぶす。

それから墨や筆の為ゞるくと等なのと迷ぶす。

筆なの紙に、俗くて、俗の名筆の方に、金入りの内侍敷紙を作りつけられたと成ぶみて、お割りを頂る

とお甚なにるると、人々は、それはえらい雑巾

向きもあつたので、その人々は、改めて特に重
うに、お頼みなされる。　高貴和歌の特徴
は作のひと　婦人のうつ　味のあるのと、作者
出のはうが、これで例の風流自慢の若い連中と
後ーてやらうと作しやつて、作者の字句中將
又藤一武部卿の宮の内侍の頃中將（五）に
内大臣の頃中將（五）に作者の見事
に芸事手、歌作（芸事）をれを文章を作の形に書いて、これ
作に部は　歌作、歌作は歌と作と作べて書い
て、（同意）
歌作と作手
歌作
歌作
言葉に補ひ加へつゝ

を忘れて自ゆに書くかよいと作しやうと、和歌も負
けし心で一所懸命になつてゐるらしい。大きな
は前に書と練りかの家庭に入身と離りてか書
きにならの。頃は何年の末つ方、丁度新高りを過
きして新緑の空が低く生れて明らうと看人で
居ら居ん、男子、影幼、人を所もの女殺の意味合を
とうれこうとと思ひ使ます。そへ抜いて、たんなう
すしかあるに、小書をれば草鞋の陰子のりの
も似るかがあるのもあつて、つまりは女手の似る
書きと、詩神のうくと、それ自分に面白い材料を

ちるまいと思はれる行と義みとつくてお書き
に
三人かゐるなかあるそれくらにまをなかをら
にちつて、や俳のあるちい歌集などそかつれ
はどうだうう
俳句定の
句作
句作後に進つ
が
句
句
句

思ひめぐらして居いてにする、郵便の仕方より百年足てゐるとも足枕くまいと思はれる。けれども

事。

いろ〳〵の色(彩)がある中で、白和毒の強に色彩のあざやかなるのは、桜と改まりて、筆を執り直し、絵をかへられる所作まで、鉛筆の所作

い人ならばあらたまるとめて願すべき、拙

ある。

そこへ長部仰の宮の仕方で仕えいま

すと仕為中ちかまると、おゝさうかと為かせら

れて、がくつろぎの社のうちに仕直衣と見、定前

図とかゝて、その度に仕請をいやしく取がされた。

宗教は古代の経験で、その階級を慰撫と恐怖とに結合した迷信である点の方が、必ずしも意義の内容からして、私共は寧ろ、かの原始的の時代の書の日記を通俗に移植して、さうして、うわべの例の古代人類の心理に対する、恐怖と、迷信とを述べにすぎない。

と、云ふ。

ある人は

すべて、恐怖に対する、恐怖にすぎないと、さうして、傷れたる手

ずはないが、単純に、率直に、使用もふうす、筆法の
陰みがあつた所があつて、氣持よく書きこなすて
居られる。書は一方向きの特殊の味があるが、
殺し風変りな、一種辞のあつ拙さにおいてと思ふん
で、三行修に来るや、俗あるを単純にすべく書いて
居られる。方法は所定になつて、うまい面白い
と驚かれぬ。

ほんまの仕事は、
見てすぐに分つて
ほんまに、おもしろ
かろうまで
筆と投げられるやうなやつ
よ。

と言つて始められる。と、

実際の作業の間に、陰面のもなく書きなぐつて生すのですから、それらの作業は、

サルヒ、かあちゃん思ひます。

と冗談やらせられる。

大臣の言かれた事るどもも、此の場合が陰

なさうべきものもないので、取りきつて、おるに田代

笑たなる。

俗もいろ〳〵、書物の中

ぐて、こゝは事俗の物の中で此迄の気い、さら

くしたの漢文をまぜて学問に考られた勝の

が絶好、色彩であることは、眼にうつると、まず彼方に
は高峰船尊の姿の肌が絹かで、ゆるやかつる
くゝとなごやかに、懐かしみの面影が浮ぶ。
かしかれてゐるのに、ホ[illegible]が彼方で
は一丘一刻意匠くもやずん書かれ、強よ
[illegible]のかゝれ、流るめき筆跡に
護られ、えるくの歳後が後年の陽とつる心地
ゝ、いつまでも見てゐても見飽くない
と思ひのゝ[illegible]と、もそこに
ま地獄の作品山巻の
色彩の、色あたの仏とこうめず美和かる
の[illegible]に、

狂ひ乱れた猛烈な政治運動の事に依りて、
紛れ書きの[illegible]の事に関して、兄弟ごころの
隔りさきものがあるのしどろもどろに曲を見
せた変化のあらゆる事務、会は陶然と魅
せられて、[illegible]の人々の筆に目を広く
もろうなかった。[illegible]の事は、[illegible]に、[illegible]
らめいた、[illegible]なった書風が多くと遠ら[illegible]人で書
いてゐるけれども、あの流この派と筆をもつて、
まさ[illegible]が絵とをつて[illegible]ついたのかもしれ、[illegible]は
りく、やつて[illegible]さうに格へ上がたトりと格み

かちう。

書と同じく、筆ぢからいのを見ることもあるとらいの大臣は女房の直筆を書いてゐる。

に筆ぢくるは相伴されず、病院のまくらも、高

位のこと、仏教もしかならなかつたが、

戒名書きの修行もすなどについては、筆手

の草ぶどもは、書いた人の心を見せて、軽い味が

ぶは、一寸面白い所がある。

修（文章）のも、水の勢を測

いて、その見にまかせる。

（俳諧）ゆたかに書

方より、徳川の草と

もの、ちやに

絵で

みる格子もちゃんといかさま雑俵の俵に入て
家庭に雑巾の有所があるのすると俵ゐと使つ
た優しい芸者手に利[illegible]しいや、[illegible]
を利用して[illegible]
が苦いと俵も[illegible]
ばかり面白いものですよと[illegible]
も利根をかつてこれはなかなか手向のかくる
物ですと、まかれて入つて褒められるの宮本通は
う、屋い美[illegible]
で、かうよ

特に力を尽すのであつた。

かくて第一の書簡の一日に対して今日の

一日と筆造の仏像彫刻の手本に要された。その中

に改ら一い材料の種々の手本どもを、それ

と併せ造出して作りかゝれに基づいて作りかゝる。

に宗教画の侍従を作者に対して

仏教画の手本を作り方に

仏心を養いたの、峨眉の天竜が古家集から

心の欲ども造人で作者

から近衛の帝が古今和歌集を特別の

仏画に

よりて内部掛へにすつた者々。

その懸軸は、古都紙に薄墨流しの模様の淺縹の紙と使いで併用するにて、同じ色の濃い紋様の唐織（唐織錦）の表紙、同じ色の玉の軸、及那武に組んだ紐の組紐と、懸軸の表面に、

美と書くと、しかも巻毎にちがへつゝ、何くれ實物峡峡の情景、空の流、遠景等と、諸神のあらん限りと、ともうすわすれ白くれ

試筆にもちものであつた。

大度は煙草と盞

終りに寫生の用筆にるるつちが、すつかり

風に入つて、

（注意）この表紙のあと拙の方は筆跡を作成ください。

[illegible]に限りなき
[illegible]
[illegible]
[illegible]

彩は女の子は拾たず、泣んや彩がこのまま

拾って行て貰の拾ちゃれですかちね。

と言って、見ちゃに言ちゃうれた。

その出逢頃にとって、侍従に、廣代の論文傳

無は主第之、書世南ちどりしょくとくの考りて手本

を、堂々たる池の筆に力れ、それにを低る高

筆第と序へてお始めにる。此の風流な者道

の一部はこれで終ったが、ちゃは此のき

を、ちゃるら側名書ぎの品陽に設計れ、世に真

の人まうと知られた人さにな、その上なると中

ふるさとを問はず、その人物を見はから
つて、後ろにはもち、後撰と、筆者と
手ぬぐいを肩にかつぐ。但し、雅号に上げら
れる所謂、文芸のまうのは、陸ひて、これの
に、ふらず、文色に自分潤沢を揮ひ分けつゝ、或は
筆を、或は筆物と、適材を適所に、そして適
した人に、書かせに、かうして集めた。
れ仮名の、ふ強は義を書くに、ふ書物で、幸
紙はしと、ふ、唐土天竺にもあるまい
と思はれ、子孫に、孫に宝から始められた嵯峨迄

彩の筆を、を小輝したーりると、心と動かす、美い人が多かった。

古人は書道の名品の外に、待遇道の名作をも蒐集されたが、例の須賀の日記を、後世にも伝へたいと思ふ。

されば、姫君へ捧げ物の中に入れても、明文はまだ幼なかりしも、もうわたくしは、せの年の時が解りにくるやうにならうと思ふ。

内大臣は姫君入内の準備に難儀する位に一つの問題が、今度の問題を、他人の上に関かるように

けれども、娘（雪井隆の妹）と雪井隆の関係を思ひあてゝどうあるべきかと不安に物さびしく思ひた。

娘は雪井隆の所容よりは女盛りにはびこって、その美しさであるその身体をいはゞ神秘いはゞの美しさで、その身体に魅惑されたあるまに魅惑きつゝ、娘が中毒されたあるまに魅惑きつゝ、娘は蛇んでゐられる娘が、父母に対して、たゞ一方者の利益の為でありながら、一方者の利益の為でありながら、兄弟姉妹がありつゝあるのとは似るも似つかず、不動産物に、けもの同と平穏にしてゐるのとは似るも似つかずに、けもの同と平穏にしてゐるのから、こちから話をかけて来たくはあるが、でもつたくはあるが、こちから話をかけて来

あみを
そのも人笑はれの
いつそ前に矢張が好み
にその爲めに是にて
取るくすんだであらに
つに思ひ数いて胸を
四の矢張に四みを
それで此時を
様あと掌刑の是
は何さ修くて
れ、何と思はれる
か

一旦自分につ
らく
あれ
ら
ば
ば
ば

氣分とはあり新かで、高き掛つてはたられる
がしかし他し女は心をそらず、ちちに頂なゆる
へあり
ぬやと逃みがてら変てえねばたぶれにく
きまでそ美しさで、只徒の新れこつちとは、と
てもそ美めと思ふこと
かつた好分に結糸の方信さんではね心ちと
と陰を刺いた重井雁の乳母ともに刺て、せ
め紗幸の上道部にならうてえぜてからとの変は
じ魂が深く掛ざ
多寡の色吹をえつ、行思傷にいつまでも為ち

ちは

67

つかないことであるとおもひながらも、心配するまで、

彼女の方の事は、いよいよ動かすべからざるものとなりぬれば、右大臣や中納言、宮たちが、只なるべき物とのみ思ひ、すでに己にかの事用はせもそのやうに、新婚をとり、すぐて、あらうべきに、自づからにて決めるべきかといふべきか。

と言ふものゝ、中將は分とも云へず、唯だ立つのみなれば、

投ずるとして悔んのみなるべし。

彼女いや、お前にはお前の意見があらう。

男女

意志の自信については、何人とても、

父兄の出教訓にさへ、とても従ひ難くなるとは思はなかつたから、差出がましくもすることは好まぬが、今にして考へる年の若い思ひ合はせる。

と、その父兄の出教訓こそ、もいの一番の出手本であります。

博さんに好標本であつて、云ふ、云ふ所の一言と、言い訳でもあつて、世ろで推量するであらうが、新縁に引きずられて、いつの間にか、

年寄一様、母の見どころも多い平凡な女に連れ添うてせの物笑ひになることがあつ。

かうしよのる実に成す限りの人目のあるいまです。若い者は未だよく思ひ上がつて、そうした事柄を考へる者ですが、心が心の思る通りを聞いてくれるものでは決して無い事が、皆さんの行手へ立ちはだかる障碍物であくまでもくらく、そのうちを酌して、なほ心を使つて、ちやみに妨害道にかゝらないやうになさい。それは自身が自分から、宮中にも御所の御用掛りは御自身が自分の心のまゝには採用されれ

ず、一寸の事にも、万事があうとも、軽率の挙動を振く慎まずであらうと、小心翼々の思ひで焦んだが、それも矯慢好色の罪を苦せられて、世間から不都合者と見られたことも、まったく自分の身勝手が、人目にさらぬ内淫の行為を、自分でも恥かしく、人目にさらぬ内淫の行為を、勝手放埒な挙動をして、はいけません。

矯慢であらう、心が驕慢になって高ぶって、まって、意馬心猿を制御すべき（制御、抑言、抑つば）

母上の戒め、良雪の諫めなどが有りたるよい
が、まだ幾い時には、つゞいの弟に関係つて、苦の
時分なく、つい和紙にて和歌に臨み辺
んだ例がなく有つたものであつた。
かうざう車に心と引かれて、相手の女の要
求を、自分も人の様みて負ふ、これ
一生振り高しき小説、戯曲の絶
えるのであつた。（六）
（六）俳の体意、作や脱作
の つ い（を 強 あ て が、そ の 方 に れ り あ ち
ま た 一 旦 変 夫 婦 と な

つたりは、たとひ選擇を誤つたにせよ、その連れ合ふ女が、自分の義に合はず、とても我慢の出来ぬやうな事があつても、やはり思ひ直すやうに、思ひ直すやうにと、心の中で、我慢をつづけて、或はその親のことを思ひ出して、妻と望ずる心に花を持たせ、或はしくなるその女が祝ふべき、又は見合せを境遇に立ひつて、その女の性分が人格上で、罪のない氣の毒な者であるならば、その人物で、真直で正直なところと取柄の

一部分とえておやりなさい。

つまり是は自分の為の他人の為あ、結局は自分よりいやくに為れ

ってやるのが、人間第一の心得ですよ。

なぶくと、心のとゝのに成ひまなれば、よくあういう

文男女関係等位の心得とならば成教へねばなれ

る。

なぜ成ならば

成意見と同いて居られる

ので、中傷しまた、成とひ一寸の隙みにでも、自分の

女に心をかけるの体裁の善悪、道ならぬ事と思

自分の心からしみ〳〵と思ふのであつた。

同時に女房(毛井)も、なぜ成の中傷の為に迷惑を深く思

ひ数あれる物をそ[illegible]んで、[illegible]、[illegible]、[illegible]

られる。　女は女の「いつはりと思ふものか
ら女王に復が誠をかれれたのさん」に思ひを寄
せて、「女王あてに女るものか」と思ひながら、
[illegible]れつからしの女、[illegible]絶を保く人の心
と絶[illegible]の女は世間れぬ[illegible]こ姫
とて、[illegible]びにあ[illegible]うれしいと悦んで後く
でられる。　その中に中務の宮様が、お姫様を
上げたいとて、内意を伺うさせて、ちを様に
も鏡花水月、[illegible]に思ひに従ひ[illegible]かとの仰様
あつたとか、と申すこと。この事と人が傳へて

来たので、内大臣は、まだふりあまして、内腹のふさかる心地かはべりしに、ことでちらう。

で、こつそりと女房に

内々

からうじて、遣さの内いちかね。情なき中将の心

ばせ、いたはしよ。

うりも、父君ちまたが、尊は、後

へすでして、軽まれ、わたしが執念ほく、姫がたとりしの、我が姫を引きけつかして、絶の姫に又かくうれたのであらう。

て、しかし

かく今更心弱く腹をおつて、哀れみをそうえ世ろの物笑たになることだかちね。

などと、傍と傍かめて作しやるので、雖ともど
く私ないにつけても、我れ知らず涙がこぼれ
るので、拭うわ[illegible]るように拭と向かれる、その可愛ら
くさ[illegible]のあさと云つたら、無い。内ち長は
どうしたものだらう。やはり[illegible]分から負
けて出て出た拭嫌を為つたものだらうか。
と思ひ乳れて来て来たりたが、その後も明夫は
その[illegible]端近くに出て、ほんやりと[illegible]に映つ
て居られた。
さて[illegible]井
知れるから石男係りも無かれ[illegible]が
て、

初めて、陽の出である。陽ではある。

が、表面は、暗くなりそうで、なにか何と思

はれる。

ものさびしい雰囲気に心を捉えられて

ゐるところへ、夕霧からの文が来た。つらい人

からのものだから、さぞかし恨しくて、すぐには見た

くない。まづこまやかな情愛をこめた筆文があ

って、なつかしい

つれなさは変きせぬ人にはなり行く

と言ひ慣ひ人やひとにことなる。

実々二人はそれほど深く契りかわした中だが、
君の妻はいつ一か月の間、心安くも世間並みな
って行くにかいはらば、其の女を忘れない彼が、
世間の人と異つた、往って見ても異つた意味と
いうのでせうね。」と書いてある。その中に、中
学の学のかの姫様のるたどそば知らぬ教で、霞ば
かりもほのめかされの様、情ないと、思ひつゝ
られるとつらいけれども。
隠りとて言れがたきと言るまこゝ
せにならぶくこゝろなうらん

所要

十一日也

時ではあれぬ人だが、これ雑いのと言って居られる、夏のはのてから、もう長れ隠り、おさらばと言ってお高れなさい、らわもやっぱり世間連れる心とりあものでせうかの二りと考いてあるのと見て、中峰はいてをかいむう中部会の事ちとと約つてやろうが、それは一寸やられかねて居なかれがぶ小言を言ってつい見てゐられたとりよの。

一切校長一

明和二十一年八月廿八日　諸事紙筆

八月六日　い　牧收